



總員運動

(其一) フットボール

毎月二回の總員運動、一は棒倒し他はフットボール、又時として綱引、野試合も行はれる。東西に分れた兩軍は今や入り亂れて奮戦して居る、鞠の高く天に飛ぶは極めて稀で多くは鞠を中心にして周圍に蝶の如き鐵拳の交換である、敵も毆る、味方も毆る、鼻血も出る、目から火が出ることもある、毆つて蹴つて走り廻つて、汗の源泉が全く涸れた頃にはどうやら勝負も決するのである。

銃器手入

緋絨鎧の若武者が栗毛の駒に鞭打つて遠からん者はとわめき立てた封建の昔も、乃至ドンと一發山の様な爆煙がブク／＼と沈んで了ふ文明の今日も、劔の錆は武夫の名折れ。

毎週火曜日の銃隊教練の後で銃器の手入がある。終て銃器點檢。





總員運動

(其二) 綱引

「頑張る」と云ふことは軍隊生活の生命である。

之あればこそ、我等の祖先は海に陸に光輝ある幾多の戦勝を贏ち得た、困苦に耐へ缺乏を忍んで頑張つたればこそ金甌無缺の國体は築かれたのではないか。此意味に於て機關學校の綱引は貴重な者である。十幾分の悪戦苦闘、最後の一分を能く頑張り得たものに勝利の榮譽は擔はれる、見よ彼等が腰の強みを、思へ其處に漲る頑張の氣分を。



總員運動

(其二) 棒倒し

海軍名物の棒倒し、紅白兩軍の猛者連。雨霞と降り來る鐵拳の下かい潜つて互ひに相手の棒を倒さんと敵陣目掛けて突進する。今正に大活劇の最中である。



總員運動

(其の四) 押へ込み

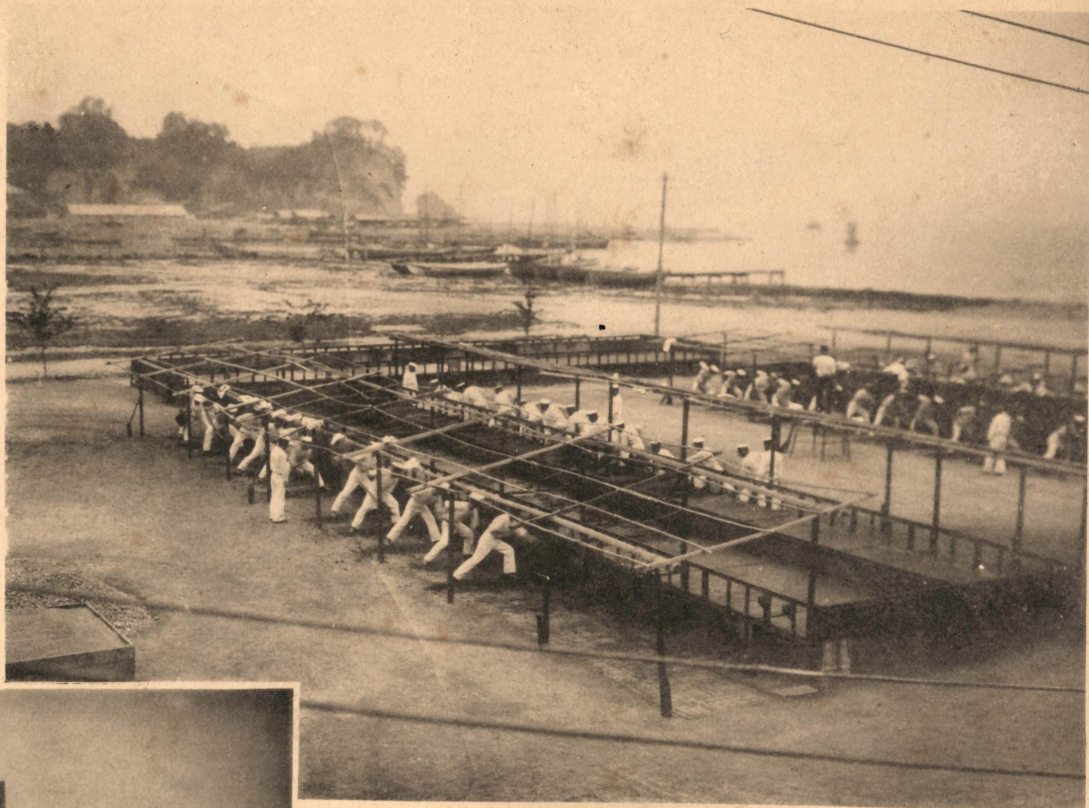
上級生も下級生も遠慮はない、敵とし見れば無暗に組み付く、組み付いた以上は待ての號音の鳴るまでは雷が鳴らうが海嘯が襲ふて來やうが、殿られやうが、殺されやうが離しはせぬ、「斃れて而して後猶已ます」とはかれ等をこそ爾申すべけれ。
若干時間の後「待て」の令がある、之の時、完全に押へ込んだ數の多きを勝とする。

總員運動

(其の五) 野仕合

石礫飛夏雨	衝崩入敵中
猛獅濶險烈	撓虎負隅雄
打打跳刀響	挑々互角戎
制贏瞻碧落	孤鵠駕南風





大掃除

毎土曜日には起床後直ち總員各寢室、温習室に配置して大掃除を行ふ、一號は箒、二號は窓拭、三號は「ソープ」



焚火術

(十能操法)

「空十能散し投げ方」用意「ビービツ」

人員調査
第何分隊第何期生徒!



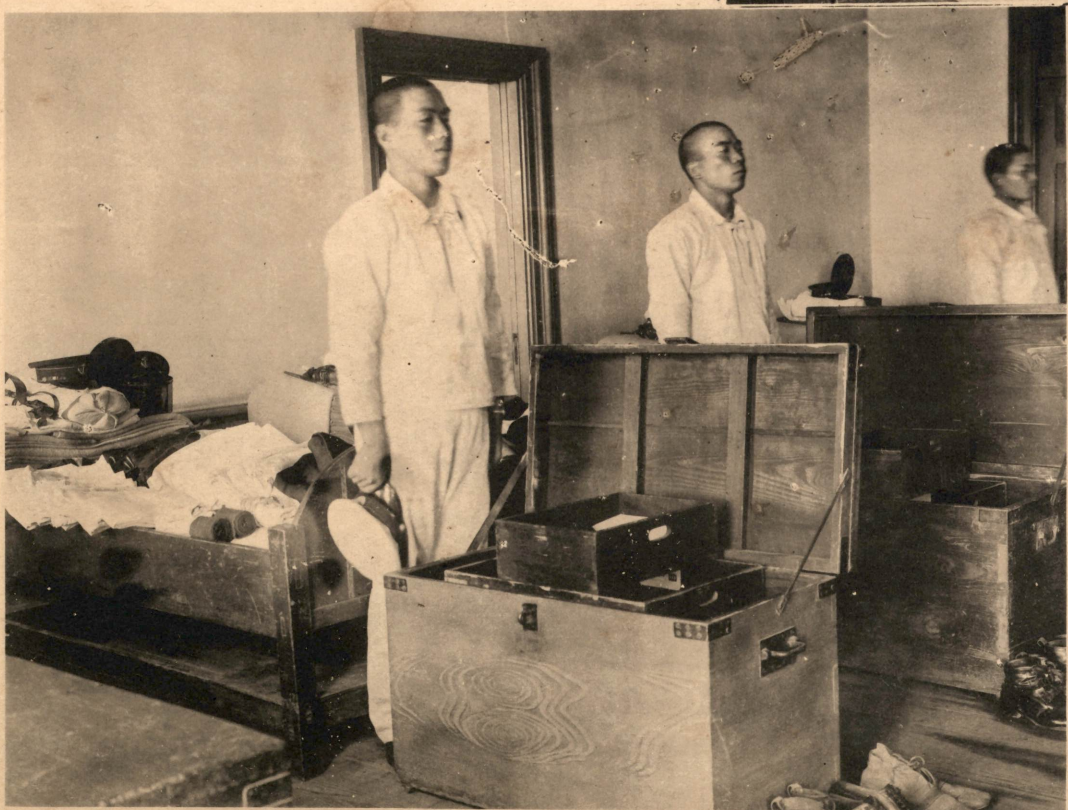
分隊點檢

月の第一日曜日若しくは土曜日大掃除後によく分隊點檢を施行せられる、校長若しくは生徒科長が點檢者となられて分隊幹事に指揮せらるゝ、各分隊員を點檢せられる。



被服點檢

被服點檢は校長又は科長これを施行し、多くは土曜日大掃除後に行はれる、支給せられたる被服一切を整頓して點檢を受けるのであるが、頗る嚴格に行はるので、この時は皆一生懸命に拙い手付で糸針を持つて其處此處と繕ひ塵を拂つて小言を頂戴しない様に文句を言はれぬやうにと努める。



校内點檢

本箱、机の抽出の整頓一糸亂れず徐に點檢を待つ



大津行

(其二)

射撃は大津海軍練兵場に於て施行せらる。
銃は三八式五連發、百發百中の名手達、時
には向ふの山の蚯蚓から愚痴を聞かされた
り心地よく晝寝の夢を貪つて居る小雀を驚
愕させたりすることがある。
射撃の歸途は大概は總員又は分隊競争の駈
走である。



大津行

(其一)

百二十の健兒「腕におぼえの銃とりて」將に
校門を出で大津射的場に向はんとす、毎土
曜日午後の此の大津行の喇叭の音はカデッ
トライフの思出なりと云ふ。



別科

(短艇)

土曜日、午後の別科は隔週に大津行と短艇、金澤、観音岬走れ、遠くは海堡まで、「オール」の音勇しく



大津行

(其三)大津射的場の的架

標的十二個あり各標的に三名の監的員を派し全体に監的長一名を附す的中點數は標旗の振方に依り合圖するものとす。



嬉しいもはの日曜日

半島の山踏破る

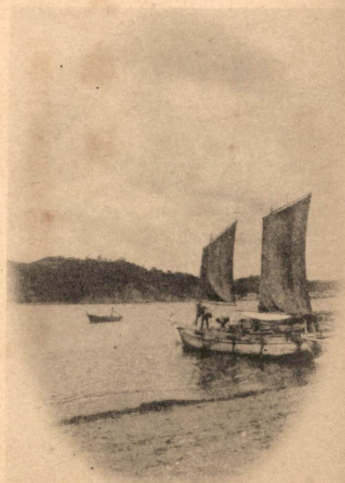
とは白濱生活の一節である。
美しい半島の自然は殺伐な生徒をして、一面男らしい自然の憧憬者たらしめた、日曜が彼等の大なる慰藉であると云ふことは即ち彼等が半島の自然を愛すると云ふことなのである。



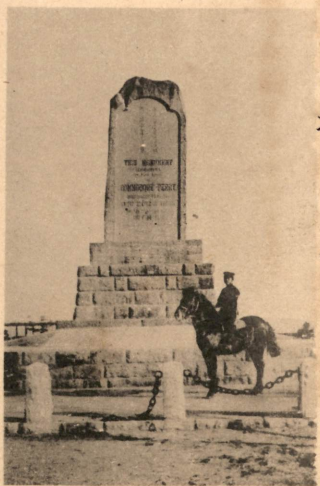
鶴岡八幡宮



鎌倉大佛



九里濱元上陸記念碑





野 仕 合

休暇後歸校すれば午後からは必ず劍道仕
合、野仕合が道場で休暇で養て來た英氣
で、才面！才胴！



遙 拜 式

祭日には生徒科、練習科總員整列の上遙拜
式が施行せられる。
寫眞の中右が生徒科、左は練習科、號令臺
上の英姿は校長閣下である。



觀兵式

毎年始業式に、生徒隊の軍様を検するため
閱兵分列式を行ふ。



兎狩り

毎年一月下旬に行はるゝ、兎狩り。

ホーイホーイ／＼と一日中荆棘を分け斷崖を攀ちて咽を涸らした甲斐あつて嬉しや熊の子程な圓々肥えた一つの獲物。オーよく捕れた／＼萬歳／＼と手とり脚とり四方八方から引き合つた揚句、到頭胴揚げにまでされて、兎こそ迷惑千萬な、而も翌々月曜日にはこの五体を百數十の小さな塊に分たれて「兎汁」となん呼べるものとなつて、人々の胃の腑に押し詰るのである。



春期運動會

(其二)

春が来た、太陽は希望の光と輝いてゐる。
生温い風は日毎に白濱を訪れて堅く蓄んだ
櫻の薄赤い唇が段々緩んで行く。

此頃大津練兵場で春期運動會が行はれる。
分隊の競點射撃を始めとして、押込み、騎
馬戦、千鳥競争、ランニングレース春の一日は愉快と疲労の
内に送られる。



春期運動會

(其二) 各個競點射撃の實況

優勝旗！手が振へる！赤玉！分隊監事の
顔！悲觀！



春期運動會

(其四) 押込

奇數分隊、偶數分隊の押込競技、上になり
下になり互ひに死力を盡して決戦の光景で
ある。

春期運動會

(其三)

「サア来い」「イザ来れ」「目に物見せん」





春期運動會

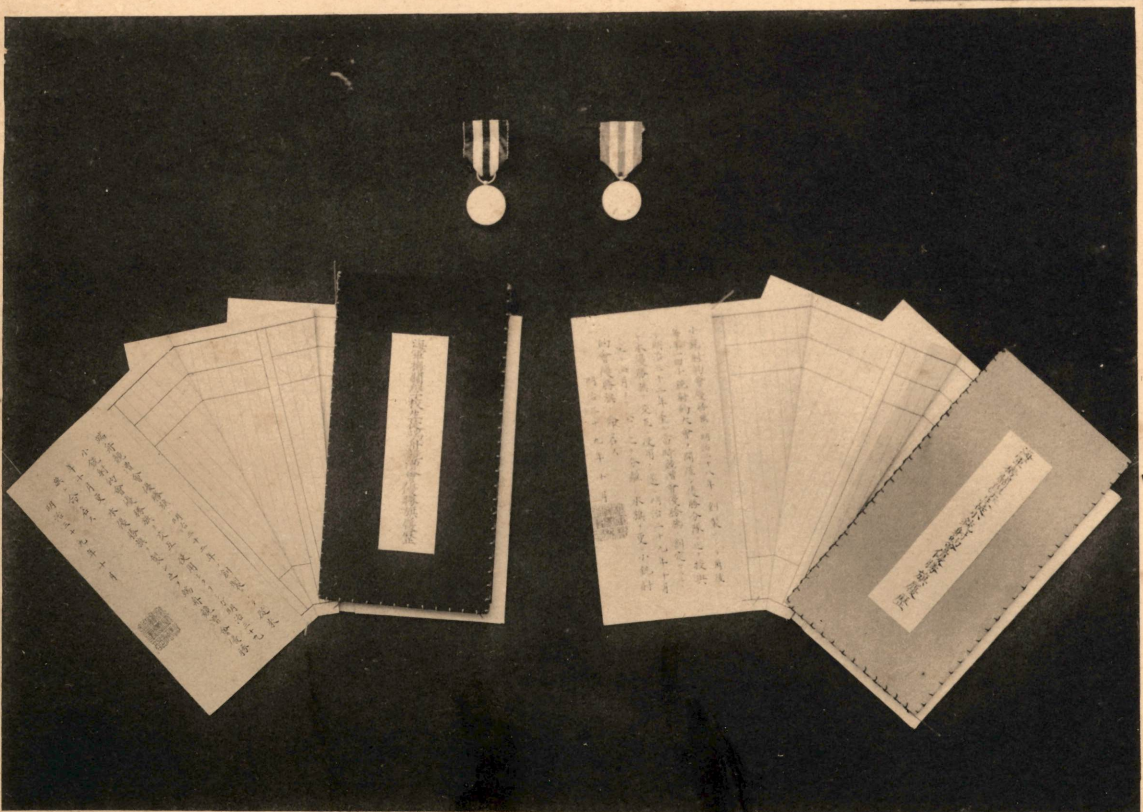
(其五) 優勝旗授與

「あな嬉し喜こばし戦ひかちイーぬ」

春期運動會

(其六)

三月下旬の射撃大會、六月初旬の短艇競漕は生徒の最も力瘤を入れるものである、何れにも分隊競争の優勝旗がある、メダルがある、優勝旗のある分隊では手雕すまじと又無い分隊では之を奪はんものと互に渾身の勢力を注いで練習に競争に精勵する、その當日ともなれば意氣は昂まつて天を突き情は熱して紅蓮の炎を吐く、而して最後の月桂冠は己に攝理によつて定められたる者の頭に加へられる。寫眞は該メダル又優勝旗の履歴を示す。





行 軍

(其二)

由良川丸一名嘔吐丸も流石に今日は蒼くな
つた者一人も見えず、備船に分乗して寒川
海岸へ上陸。
俊寛のやうに怨めしい顔をして甲板に佇め
るは健康上行軍参加を差し止められたる一
人の生徒である。

行 軍

(其二)

由良川丸でも寒川沖に投錨して居れば雄姿
堂々たるものだ。
二丈程の長竿を以て氣長い船頭衆が舟を漕
く。船から陸まで半里近い間を竿一本で押
し渡した元氣には感心したが効率の無さす
きる推進器にも感心した。





行 軍

(其三)

寒川沖に由良川丸を停めて氣の長い船頭衆の長い竿で漕ぐ長い通船に長い間乗った揚句、漸く寒川海岸へ上陸した。
 「陸戦隊だから海から上る稽古をするんだとよ」と見物して居る一人の利巧な人が教へて居た。

行 軍

(其四)

寒川に上陸した大隊は千葉氏の館趾猪の鼻臺に上つて暫時休憩。由良川の臭い Odour で一夜明した一同は此の高臺に上つて思ふさま大欠伸を試みた。ホッと吐き出す呼吸が見る／＼八方へ擴がり飛んで目の及ぶ限り街と言はず郊外と言はず我今立つ臺より始めて一面の紅霞と化した、其紅霞を人は櫻と呼んで居た。一同は紅霞の中で十分完全に自然と融け合つてしまつた、やがて再び軍容を整へて歩き出さねばならなかつたので一同は又銃線に集つて命令一下直ちに此の欠伸の精と別るべく此の臺を下りんとして居るのである。





行軍

(其五)

敵は勝地に頼つて我を待つ、我は進んで此の敵を殲滅しなければ我任務は完了されぬ、茲に於てか大隊長は「雄死あるのみ！」と叫んで前進突撃の嚴命を下した、軍は銃劔を振ふて朝霧の絶え間絶え間より打つて入る。



行軍

(其六)

「御參なれ」

「六百！打方始め」

行軍

(其七)

降つては歌み歌んでは復た降る春雨も何の興かは。唯肅々として軍を遣る。泥濘に足を攪はれて見事にステーンと轉ぶ隣兵をデロリと顧みたまゝ、笑も含まぬ顔の緊張は流石に敵は近きにありと知ればこそ。歩一刻一刻敵も味方もお互に銃剣を擬して近寄りつゝあるといふ感が誰しもの頭の中に湧き起る。銃持つ拳にヒラリと一片戴つたのは、此の雨に潔よく梢を離れて舞ひ下りた山櫻の花。武士の最期を今改めて我に教ふるか可愛の花よ。

不意に前の森蔭から響く銃の音、一ッ、二ッ、三ッ、仕舞つた！伏せ！見よ敵は左に現はれた、それ右に延伸増加する、進め！！



行軍

(其八)





行軍

(其十)

戦すんで汗と塵埃とが固着した顔はさらでも黒きを彌黒く光澤さへついで宛然不動様の子分のやうな色艶となつた、シヨボ〜降り出した春雨も趣深く、新勝寺の鐘が黄昏を告げてボンヤリ煙つた森の奥から響いて来る、宿舎に重い武装を解いて名物の羊羹も食へると思へば疲労もいつの間にか消え失せたやうな。



行軍

(其九)

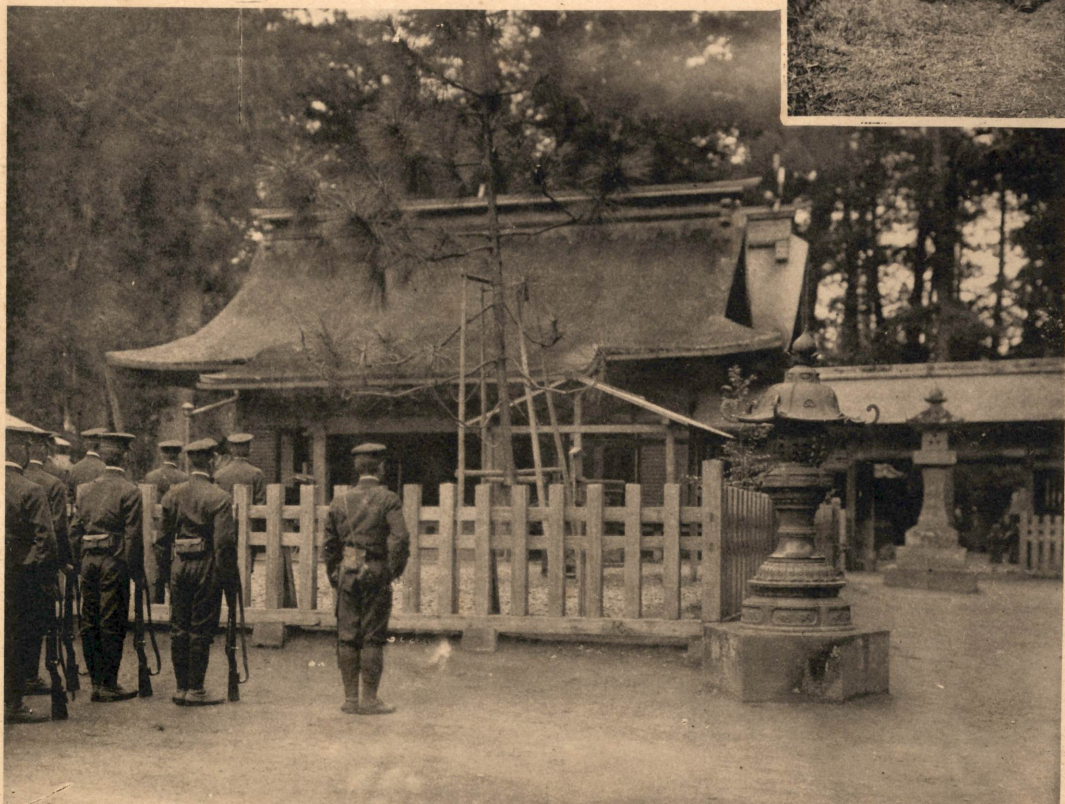
成田より佐倉に到る途追撃戦後の大休止、路傍の森林に汗を拭ひ涼を納る。



行 軍

(其十二)

湿やかな空氣が何とも知れぬ昔の香をもた
 らして身にヒシ／＼と迫つて来る、その中
 に一同は捧銃の禮を行ひつゝ、「國の鎮め」を
 吹奏し奉つた、神殿の奥より洩れて来る神
 官の澄んだ祝詞の聲と、雅な鉦鼓の音と喇
 叭の音とが皆一つにミングルして變妙なメ
 ロディが漂ふ、そしてそれが自づと人を深
 い／＼暗い穴に引き入れてゆくやうな——
 サイレンの弾じた琴の音のやうな一種の魅
 力を有つて居た、我も人もいつの間にか頭
 を下げずには居られなかつた。



行 軍

(其十一)

鹿島詣での途中
 教官、監事



行 軍

(其十四)

鹿島祠前に於ける本部
(生徒科長以下)



行 軍

(其十三)

千年の老杉蟲として鬱生し怪鳥樹間に啼いて山更に幽なり、鞞業の武神長へに此處に鎮座ましまして皇國の基礎要石と偕に動きなく、皇統の連綿不斷御手洗の水と俱に窮りなし、後日汎日本主義を宇内に宣傳して立つの秋自ら以て、武靈槌神たらんことを欲する生徒一同は茲に神前に額付きて武運の長久と擁護の厚からんことを惟れ祈る、神官の奏する祝詞



行 軍

(其十六)

鹿島祠前に於ける

第二分隊監事及び生徒星野監事



行 軍

(其十五)

鹿島社前に於ける

第一分隊監事及び生徒



行 軍
 (其十八)
 鹿島神社境内に於ける
 第四分隊監事及び生徒



行 軍
 (其十七)
 鹿島祠前に於ける
 第三分隊監事及び生徒



行 軍

(其二十)

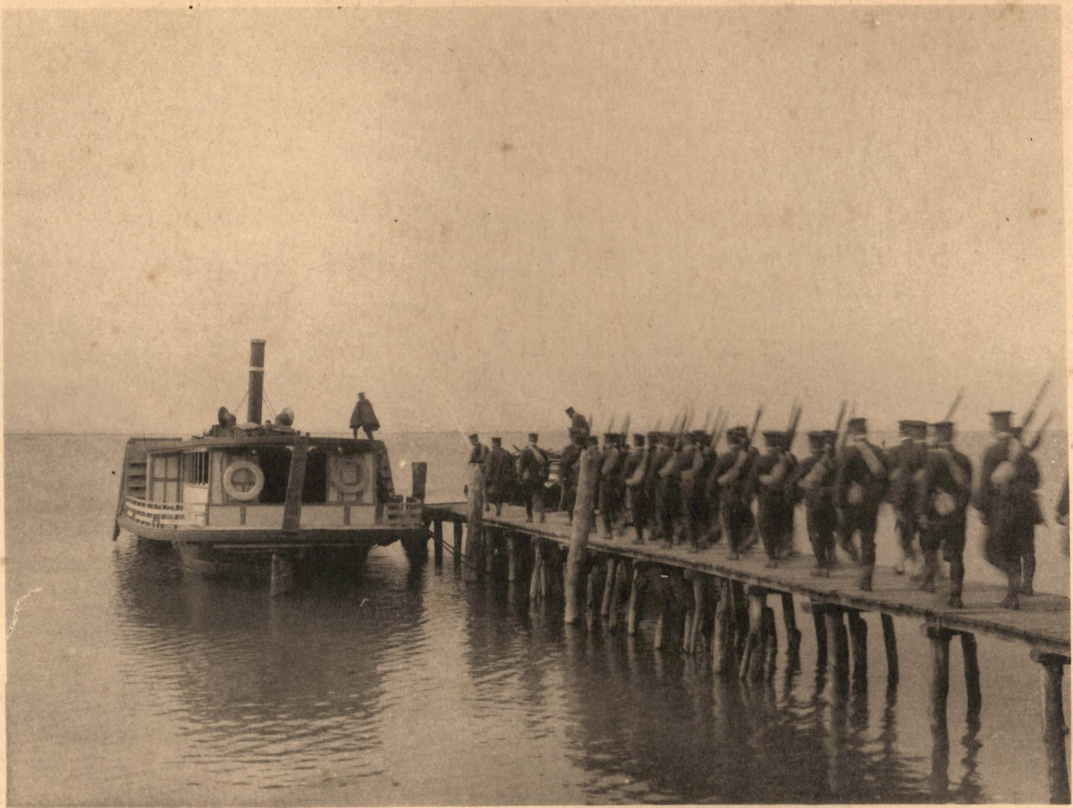
鹿島祠前に於て
第六分隊監事及び生徒



行 軍

(其十九)

鹿島詣で記念樓門前に於ける
第五分隊監事及び生徒



行軍

(其廿二)

鹿島神社参拜を了へて再び通運丸に使乗佐原に向つて解纜せんとして居る寫真である汪洋碧水連天遙といふと少し御馳走過ぎるけれ共北浦も此の邊は仲々に廣い、呑氣なバツドル船はノコノとこの廣い北浦から狭い運河へと入る、兩岸鷄聲啼不止。己に數里はすきたと思つて振り返ればその水村は依然として二三丁の後方にある、李白もこれでは千里の江陵百日にして還ると嘆かざるを得まい。

今や發動艇漸くこのバツドル氏を逐はんとして居る。けれ共吾人はこの水の郷に最も適したバツドル氏を逐ふことは水郷の美を損ふものとして不賛成を唱へるに躊躇しないものである。

短艇競漕

(其一)

赤と白と青と三艘のカッターはもうスタートの用意を整へて活動の前の死の様な静寂の中に合圖の銃を待つて居る。

聽て銃音一聲、今までの沈黙は急に破れて、けたましい進軍の譜につれて、蜈蚣の足の様な十二本のオールの先に白い水煙がバツと散る。熱興した應援の聲は油を流した水の面に木霊を響かせてボートは既に遠く去つた。





短艇競漕

(其二)

廻る、廻る、赤は先廻航を始めた。次で青、白。赤の艇首に、動かざること山の如き……監事の姿が一際目立つ。狂する様な應援は復起つた、拍子、叫喊、軍樂の奏音は全ての物を包んでラストヘビと鳴るかのやう。突如、銃聲は響き渡る青は先づ決勝點に達つた。半艇身を隔て、赤と白が。斯くしてレースは終つたのである。選手は歸つた。青分隊の監事の眼には白い雫が光つて居た。

短艇競漕

(其三) 優勝旗授與

前年の優勝分隊は茲に優勝旗を返納し、今日天晴れ月桂冠を手に入れた分隊に改めて授與せられる。勝敗は兵家の常。さはあれ。





航海

(其二) 練習船由良川丸

喫水量二千噸、速力十二浬、

「ロシヤ」から捕たもの由

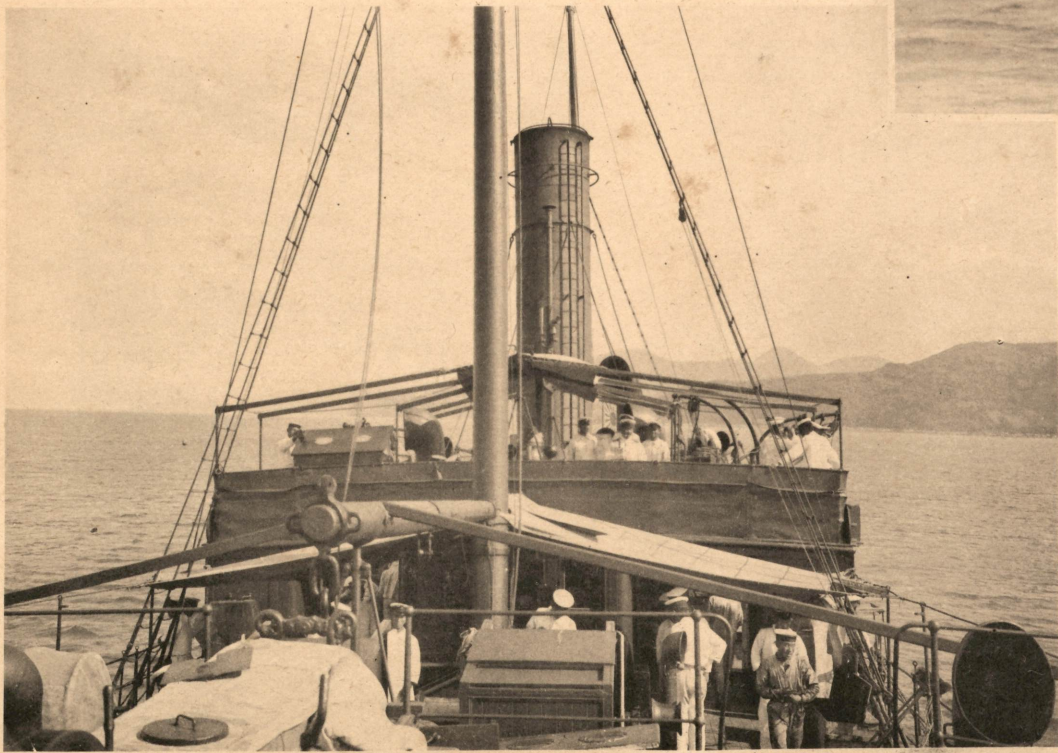
夏冬にはこれにて近海航海に出掛ける。

航海

(其二)

由良川丸の艦橋

「風は追手よ。大島が見える」





航海

(其四)

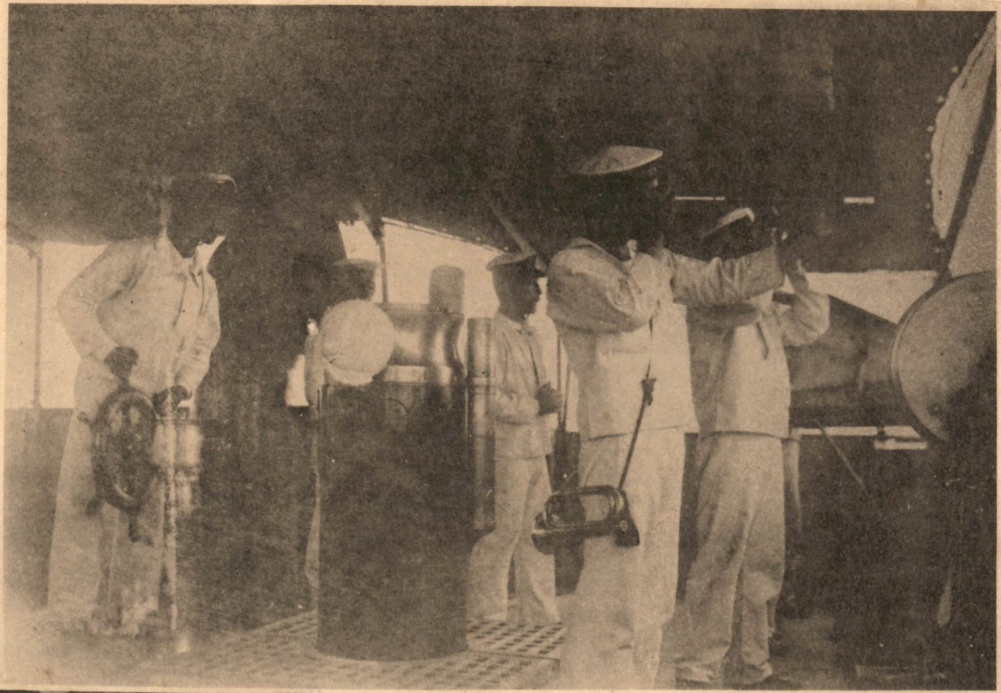
ソヨとの風もない相模灘の眞晝。日光の直射によつてデッキのピッチが融けて流れ出さんとする。ピッチも堪らんコツチも堪らんと後甲板にオーニングを張らんとする所。



航海

(其三)

由良川丸の船首。



航海

(其七)

由良川丸の生徒室



航海

(其六)

甲板當直、

面舵十五度！

宜候！

航海

(其十) 伊勢詣

何神のおはしますか
は知らねども
かたしけなさに涙こぼるゝ



航海

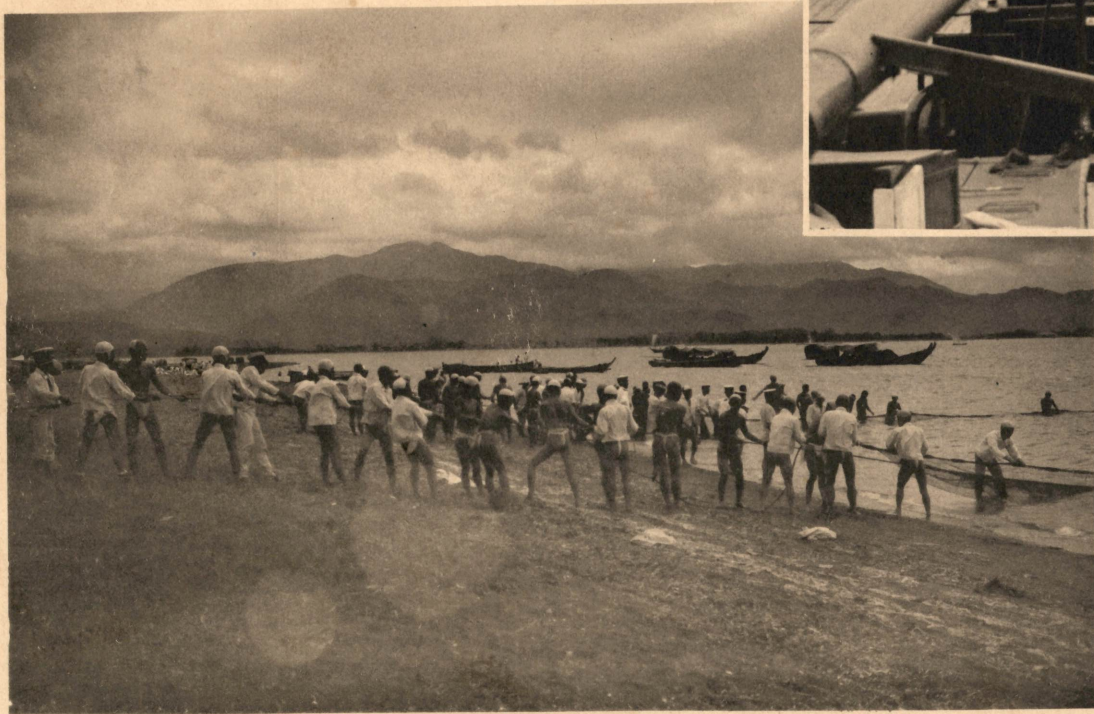
(其八) 遠州灘上富士遠望

船が黒潮に乗つて滅切海の色が變つた。

蒼黝く澱んだ水の上には時々飛の魚が飛んだり、海豚が船の行手を横ぎつたりした。

あ、富士が見える！

入道雲の中からスツキリと白銀しろがねの富士の根が思はぬ高さに聳えてゐる。



航海 網引地 (九其)

○る繰手を網てへ揃聲掛が者若な黒眞るた然夫漁 ○遊清の引網に原松の保三
○るゐてね跳が鯛津興な赤眞はに中の網！快愉快愉



卒業式大饗堂

候補生が榮ある宴なる哉。嬉しさは胸に滿つるも再び校門に歸へらぬ悲哀袖を濡すを如何にせん。さらば白濱校舎よ。健在なれ。三年有餘の恩を謝す。

海機09期

整理 卷号	E90-64
寄贈者名	赤羽龍熊
寄贈 年月	40.7.-1
一巻	2454

